月刊ひこばえ1月号

令和5年1月1日発行　第177号
NPO 法人文字情報支援ひこばえ

新年あけましておめでとうございます。 今年も充実した年になりますよう、ご祈念申し上げます。
今年の干支はうさぎ。うれしいことがたくさん起こり、また要約筆記の技術向上をめざしていきたいですね。
さて、2023年初春にふさわしく、絵本作家として活躍されている羽尻利門さんにご寄稿していただきました。
1月号、2月号の2回シリーズでお届けします。

特別寄稿

言葉と絵が果たす役割

絵本作家　羽尻 利門

絵本は、言葉と絵を組み合わせた表現手段です。その組み合わせ方は、作品づくりの根幹に関わる部分であり、その表現方法は作家によって千差万別で、優劣はありません。

僕個人は、文と絵どちらもつくる作品に関して、「絵を主たる表現方法とし、絵ではどうしても伝わりづらいことを言葉で補う」というスタイルを基本としています。 いつもそう出来るわけではないですが、 代表作「夏がきた」(あすなろ書房)は、 そのスタイルが色濃くでた作品です。言葉がなくても絵でストーリーをイメージすることができます。その点が評価されて、国際児童図書評議会(IBBY)のバリアフリー部門の図書に選定していただきました。日本語を母語としない読者や、文字を読むことが困難な読者にも親しみやすいというのが、選定の理由の一つです。

一方で、この作品は、言葉にもしっかりと役割があります。「かぜも　おひさまも　きのうと　ちがう」の文で表現する、気温と光の変化や、「まちにまった　ぼくらの　きせつ」の文から伝わる、子ども達がずっと夏を待ち焦がれていた気持ちなどは、どうしても絵で表現するには構成が難しいのです。言葉と絵、それぞれがしっかりと役割をもって読者に伝わると、最大限に作品の魅力を感じてもらえます。

このことは、耳の不自由な方に、文字を用いて情報を最大限に伝える仕組みと通じるものがあります。ひこばえさんの活動は、情報の発信者と聴覚障がいの方々をつなぐ、大きな架け橋になっているのだと思います。

羽尻 利門(はじり としかど)さん
絵本作家。「神社のえほん」(あすなろ書房)をはじめ、多数の作品がある。小学校での読み聞かせも行っている。阿南市在住。

【1月の予定】
7日(土)新未来とくしま講座6－⑥
29日(日)小学校人形劇の台詞出し
29日(日)人形浄瑠璃中村園太夫座公演

【1月の勉強会】
ふれあい健康館 10:00～12:00
8日(日)3階・研修室1
21日(土)1階・セミナー室